

美しい多摩川フォーラム

新発見！

多摩の物語

丹波山・小菅・檜原・福生・
八王子・稲城・世田谷で出会う物語

はじめに

いよいよ四冊目になりました。多摩は物語の宝庫。新しい情報が次々に発見されます。また、八王子に関しては、驚いたことに、メンバーの多くが在住や勤務経験があり、その思い出は養蚕・桑と何らかのゆかりがありましたので、今回特別に「桑都^{そうと}八王子と私の思い出」としてまとめることにしました。

多摩川はかつて水量が多く、流域では、今以上に住む人の暮らしと直接結びついていました。古来、民話のみならず、神話、万葉集も伝えられています。川の氾濫、洪水などに幾度も遭い、自然と向き合ってきた歴史もあります。また、江戸への物資の輸送は、流通の発達と繁栄をもたらし、人口の膨らんだ江戸の町の水不足解消をはじめとして、今も東京の重要な水源になっています。

美しい多摩川フォーラムでは、多摩川流域の自然、食、文化が調和した質の高い「観光ビジネス」を創出し、都市部や農村部など様々な顔を持つ地域どうしでの「観光交流人口の増加」

による地域の活性化を目指しています。その取り組みの中で、地域に伝わるいわれや昔話、食文化、歳時、風土など、地域独特のもので、かつ地域の人々が大事に受け継いでいるものを、地域の宝（資源）と捉えて着目し、観光や地域振興の素材として活用してみようと、「多摩の物語」の制作が始まりました。日ごろから「語り」の活動をしているメンバーでチームを編成し、メンバー自らの取材と執筆により仕上げ、執筆者自身が「語り会」等で伝えてきております。その土地を訪れる訪問者の立場で、「語るための物語」として編んだその物語には、各地で出会う、素敵な人々、困難を生き抜いた物語、不思議な話、様々な文化が描かれています。それらは平成二十六年、平成二十八年、令和四年に、冊子「多摩の物語」にまとめられ、好評を博してまいりました。特に最近、他所から語りの上演依頼が複数入るなど広がりが見えております。

「多摩の物語」により、私たちの祈りや願いが届けられればと思います。

ご協力いただきました多くの皆様にも心より感謝申し上げます。

令和七年八月

美しい多摩川フォーラム副会長 平野啓子

目次

一、丹波山編	6
丹波山村 二つの物語	6
将門と七ツ石	7
七ツ石神社の再建	8
二、小菅編	16
代々口伝で語り継がれた伝説	16
玉姫伝説	17
三、檜原編	25
檜原村の話	25
鬼源兵衛の話	27
四、福生編	30
福生の話あれこれ	30
天狗のいる里	32

むじなと洪水 | 34

五、稲城編 | 42

稲城の昔ばなし | 42

坂浜の一番鶏 | 43

青龍にのってあらわれた妙見さま | 47

六、世田谷編 | 50

招き猫の物語 | 50

招き猫で有名なお寺 | 50

世田谷の民話 | 53

からすが村の百姓家を守る | 54

太子橋の子づれキツネ | 56

七、八王子編 | 59

桑都八王子と私の思い出 | 59

八王子の名前の由来と思い出 | 59

織物の町八王子 | 63

養蚕の指導をしていた父の思い出 | 64

八王子と私の思い出半世紀を経て | 68

八王子で体験した空襲のこと | 70

「桑の都」八王子に伝わる松姫さまのお話 | 72

松姫さまの糸毬ゆらり | 73

丹波山村 二つの物語

キャッチフレーズは、「大自然のポケット 山の山の手 丹波山村」

山梨県の北東部、東京と埼玉の県境に位置する丹波山村は、二〇〇〇m級の山々に囲まれ、多摩川の源流となる丹波川が東西に流れる山深い里です。村全体が秩父多摩甲斐国立公園と甲武信ユネスコパークの中にあり、人口はわずか五〇〇名余りという関東でいちばん小さな村です。

日本百名山にして、東京都最高峰の雲取山（標高二〇一七m）には、季節を問わず多くの登山者が訪れます。丹波山村鴨沢からの登山コースの途中、「七ツ石山」の山頂付近に七ツ石神社（七ツ石権現社）があります。

この七ツ石神社にまつわる二つの物語を紹介しましょう。

第一の物語は、この地に古くから伝えられている昔話です。

将門と七ツ石

一千年もの昔、時の朝廷にそむいて兵を挙げた平将門も、ついには関東制覇の夢やぶれ、山深い七ツ石山まで落ちのびてきました。一方、将門を追って来た弓の名人俵藤太は、三頭山まで来て、やっとはるか向かいの七ツ石山頂に将門らしき人影をとらえることができました。藤太は弓で射ようとしたが、同じ装束をした武者が七人いて、どれが将門か見分けが付きません。困った藤太は、信仰する成田山の不動尊に一心に祈ったところ、「影武者六人はわらで作られし人形なり、朝行きて、将門顔を洗いしおり、湯気立ちのぼり、白き息あぐるを打て」とのお告げがありました。次の日の朝、藤太は七ツ石に立ちのぼる白煙めがけて、強弓をキリリと引きしぼり、矢を放った。矢は遠く飛び、ねらい

たがわず将門を打ち倒すことができました。

ところで、将門を英雄として崇拝する奥多摩の人々の中には、このことをうらんでか、今でも成田不動尊を決して信仰しない人もあるといっています。また七ツ石山に並び立つ七つの巨石は、将門七武将の化石だといわれ、このことからこの山の名がつけられたといわれています。

〈引用作品〉「おくたまの昔話第一集」 奥多摩民話の会

第二の物語は、まだ記憶に新しい、「七ツ石神社再建」の物語です。

七ツ石神社の再建

将門も祈願したであろう七ツ石神社は、青梅の「武蔵御岳神社」や秩父の「三峰神社」とともに狼信仰の痕跡を残す社です。ところが、平成二十八年頃の七ツ石神社は、社は傾き倒れそうなまでに荒れて、オオカミとされる狢犬もひび

割れ・欠け落ちて、今にも崩れそうな有様でした。それは、麓の小袖集落の衰退や、ご神体が下されたことばかりでなく、何よりも、神社が標高一七五七mの七ツ石山の山頂付近にあったことを思えば、仕方がないことだったのでしょうか。

それでは、どのようにして七ツ石神社は再建されたのでしょうか。

それは、平成二十八年、村の「地域おこし協力隊」として移住してきた人に始まります。この人は、子供の頃に家族と訪れた神奈川県博物館で、オオカミの展示の前から離れなかったそうです。そして、「絶滅」の意味も分からないまま「もう会えない」、「かわいそう」と涙した少女でありました。やがて、大学で「伝承文学」を専攻、三峰神社のニホンオオカミフォーラムに友人と参加した折に不思議な体験をしたそうです。「午前四時頃、奥の院へと続く道で真っ白な大きな犬が現れた。しばらく見つめあった後、白犬は高く跳躍して茂みに消えた。その辺りを探したが、何の痕跡も無く静かだった」とのことです。

また、大学のフィールドワークで荒廃した七ツ石神社に出会い、個人的に調査を続けていたそうです。山や文化財保護等を仕事にしたいと思っていたところ、縁あって丹波山村の「地域おこし協力隊」に応募、採用されました。その人は、現在、丹波山村「郷土民俗資料館」学芸員の寺崎美紅さんです。

役場では、資料を配っては七ツ石神社のことを話し続けました。更に、「狼を絵柄とした手拭い」の企画・販売をします。やがて、「寺崎が何かやっているようだ」と噂していた人々にも理解が進み、神社は村指定文化財となり、修復へと動きだしたのです。

さて、神社修復に向けては大きな難題が有りました。それは、標高一七五七mの七ツ石山山頂付近、登山道で三時間余りかかる場所での修復作業であることです。「どうやって、旧社殿を解体、狛犬とともに運搬・下山させるか」、「新社殿・修復した狛犬の山上げはどうするか」、「何よりも、引き受けてくれる会社はあるだろうか」等々。「誰に、どうやって、頼めばいいのか」人づてに聞

いて回るうち、山梨にある神社の宮司さんから『面白いと思えば、やってくれ人だから』と、地元（山梨県）の宮大工を紹介されます。社長は、身延山久遠寺の宮大工集団・下山大工の棟梁家を先祖に持つ人でした。社長を交えた担当者との打合せが始まりました。寺崎さんは、「狼信仰の伝承」や「七ツ石神社修復の意義」などを懸命に話しましたが、「修復程度なら宮大工でなくても？」といった担当者らの雰囲気です。その時、眼を閉じて聞いていた社長が口を開きました。「狼が狛犬なんだ。珍しいね」・・・そして、「他では引き受けてもらえなかったんでしょ。うちがやるよ」と言ってくれたのです。先人への畏敬、建物だけでなく伝統や伝承を伝えていく意義など、二人の想いが共有された瞬間でした。その場で、山登りをするという設計士に連絡、打合せとなり、「せっかくなら」と、神社建築の代表的な「一間社流造」様式の採用、山上での作業を考慮した分割構造として再建することが決まりました。こうして、「修復程度」と考えていた計画は、「神社再建」へと大きく展開しました。狛犬の

修復、レプリカ製作の会社も決まりました。

村では、「七ツ石神社再建委員会発足」とともに再建予算も確保され、計画は大きく前進しました。

二〇一八年（平成三十年）十月十五日、いよいよ新社殿の山上げの日です。ところが、上空は霧が立ち込めて視界が悪くヘリコプターは飛べません。その後も地上班と山上班とで無線連絡を続けましたが、上空の霧が晴れることはなく、結局この日の山上げは断念されました。

そして、再チャレンジの翌日、「天気の回復は？」「山上の視界は？」「ヘリコプターは飛べるか？」・・・、みんなが祈るように空を見上げた。湧いては流れる朝霧の中、七ツ石山の姿が見えた。この機を逃さずヘリコプターは離陸・上昇して、漸く新社殿は無事に山上に上げられました。後にして言えば、視界が晴れたのはこの時だけだったのです。その後の数日間も霧と小雨の中、

大工さんが交代で社殿を組み、職人さんが屋根を銅板で葺いて完成させました。こうした手作業により、ご神体である大岩との絶妙な距離感の新社殿が完成したのです。新社殿は、「一間社流造」様式の立派な社です。

【「流造」とは、神社建築の代表的な様式の一つで、上賀茂神社（三間社流造）などがある。】

十一月七日、修復された狛犬は関係者により新社殿に奉納されて、本格的に公開となりました。その日は、かつて七ツ石神社のお祭りがあった日だったのです。

こうして、「七ツ石神社」は、始め一人の思いから、人と人とが次々につながっていき、それらの人々の思いが集まって見事に再建されました。

この物語の結びに、「七ツ石神社」最後の氏子となった古老の歌を紹介します。

「天高し 七ツ石山の晴れやかに 錦秋の紅葉 四方に輝く」 小袖講中

現在、丹波山村では「村のシンボル」として定着しつつある「狼」をモチーフとした様々な商品が展開されています。それらは、鮎や舞茸、ジビエなどの農林産物とともに、ふるさと納税の返礼品としても活用されています。

丹波山村は、四季折々に訪れてみたくなる魅力あふれる多摩川源流の里です。

「多摩川夢の桜街道」桜の札所・八十七番」の「丹波山溪谷・のめこい湯周辺」もあります。

〔再建前〕



〔再建後〕



天然温泉に浸かりながら桜を愛でるのも一興、老いも若きもみんな「よってかせ」（寄って行って）”

〈取材協力・写真提供〉

丹波山村教育委員会・郷土民俗資料館 学芸員 寺崎美紅氏

（横倉）

代々口伝で語り継がれた伝説

山梨県北都留郡小菅村は東京都奥多摩町に隣接し東京都心から車で二時間ちよつと。道の駅こすげにある「小菅の湯」に訪れた方もいらつしやるのではないでしょうか。

村には多摩川源流の「小菅川」が流れ、日本で初めてヤマメの人口孵化に成功した村です。緑豊かな森の散策やキャンプ、溪流釣りを気軽に楽しむことができます。この小菅村でヤマメの養殖やキャンプ場を営んでいらつしやる横瀬家十五代当主の横瀬健さんのお宅には、八百年前から代々口伝で語り継がれている伝説があります。

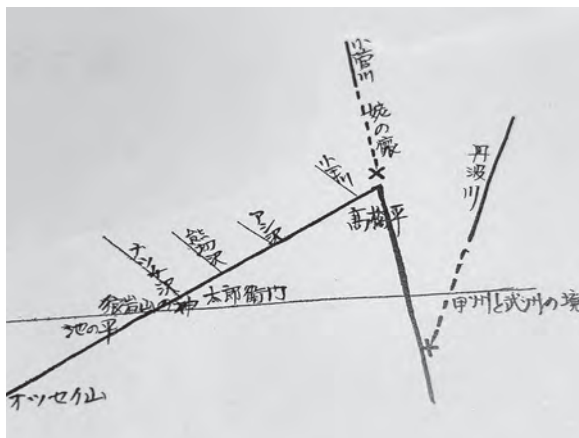
伝説の主人公「玉姫」は、鎌倉に幕府を開いた源頼朝の御家人、畠山重忠の娘と

言われ、重忠は精錬潔白な武蔵武士でしたが、頼朝の死後幕府内部の権力争いに巻き込まれ、北条時政の醜い陰謀で非業の死を遂げたのでした。この時、重忠の居城菅谷館（埼玉県比企郡嵐山町菅谷）に残された娘「玉姫」の命も狙われ、このことを重忠の残党が館に告げに來たことから、玉姫たちは急ぎ館を後にしたのでした。

玉姫伝説

昔々、甲州と武州の境を、僅か十人程の家来とお供を連れ、鎌倉を目指して旅をしている玉姫一行がおったそうなの。

玉姫が生き延びるためには、玉姫の伯母の北条政子に頼る他はなかったん



横瀬健氏の地図

じゃ。

とにかく政子は、頼朝様亡き後も幕府の中枢において尼將軍と言われたお方じゃ。

玉姫たちは、秩父の山を抜け秋も深まる頃、この小菅村余沢にしばらく滞在しておった。それは玉姫の姥が旅の疲れで体が弱り、もう旅を続けることが出来なくなっておったからじゃ。熱のある体で姥は冷えた玉姫の体を抱き締め暖めたそうじゃ。

玉姫は姥の暖かい懷で別れを惜しみ悲しみに泣き、皆に見守られながら姥は死んでしまったそう。村人たちは哀れに思い、姥を手厚く供養したそうじゃ。そして玉姫たちを大切に匿い、毎日食べ物を選んで山の雪が消える春を待ちわびておった。

ところが、ようやく春が来る頃、追っ手も迫っておった。皆別れを惜しみ、やむなく玉姫の家来たちは鎧と兜を捨て、人目につかぬように村を後にしたん

じゃ。

村人たちも玉姫一行が一日も早く無事に鎌倉に落ち延びることが出来ますようにと、涙で祈りながら見送っただよ。

玉姫たちは道無き山の中、刀で木を切り倒し、谷に橋を架けながら、それは難儀な旅を続けたんだと。

この旅の中で、玉姫に尽くす家来の大青おおせいという若者がおった。

大青は、玉姫の父、重忠が生前崇敬していた三峯神社から付き人として送られた才氣溢れた若者で、いつしか玉姫も大青も想い合うようになっていたんじゃない！

けれどある日、とうとう喰う物もなくなり皆が力尽きそうになった時、突然！大きな熊が玉姫たちに向かってきたそう！その時、大青は素早く刀を抜き、玉姫を庇い熊を斬り倒したそう！

そして、ようやく喰うものにありつけたと、その熊を焼いていると、なんと

不運なことに、その煙が追っ手たちに見つかり、たちまち囲まれてしまった！

この時、大変な斬り合いになり、家来の太郎衛門と腰元のナツチ他、何人かが斬られて死んでしまったと。それでも大青は必死で玉姫を守り、二人は山中へ逃げたんじゃない！

息も絶え絶えにしばらく行くと、大きな池の前に辿り着いた。二人は立ち止まり池の水で喉の渇きを癒したかったんじゃないが、すぐさま追っ手たちに囲まれ、とうとう逃げることも出来なくなってしまう！すると、大青はとっさに玉姫の手を取ると、なんと二人は池に身を投げたんじゃない！

肝を抜かれた追っ手たちは皆、固唾を呑んで池を覗き込んでおると、この池の神の霊驗か、たちまち玉姫は大蛇となり大青は狼となって追っ手たちを次々と退治したんじゃない。

それからしばらくの間、その池の中で大蛇になった玉姫と、狼になった大青は毎日仲良く暮らしておったそうなの。

ところが、ある年、毎日毎日雨が降り続き、とうとう池が壊れ大蛇の玉姫は流されてしまった！

大蛇の大きな目が夜の真っ暗な谷を明るくしながら海まで流れて行ったんじゃない。まるで目玉が大きな提灯のように村人には見えたそうじゃ。

村人たちは、玉姫が流れたこの川は玉のように美しい源水じゃったので、玉姫の玉を取って「玉川」（鎌倉時代から江戸時代にかけては玉川と表記）と呼び、なんと將軍様にも献上したほどの名水じゃ。

一人残された狼の大青は、大蛇となって流されてしまった玉姫を想い悲しみ、「オーオー」という遠吠えが大正の初め頃まで聞こえ、村人には「姫！ 姫！」と玉姫を探して鳴くのじゃと哀れに思い、鳴く声が聞こえる度に山を見上げたものじゃよ。その名の通り真っ青な美しい大きな山じゃったので、大青山「オッセイ山」と言うようになったのじゃ。玉姫が流れた池の跡は「池の平」と言っ

てなあ。その直ぐ横には狼が住んでいた大きな岩を「狼岩」と言って、山の神

をお祀りし、山と人々を守っておくれとお願いしておるのじゃ。

そして熊を斬った谷を「熊切沢」。家来の太郎衛門が斬られた所を「太郎衛門」。腰元のナツチが斬られた所を「ナツチ沢」。姥が死んだ所は、今も暖かい場所なので「姥の懷」と呼ばれておるんじや。

村人たちが大きな岩の下に、玉姫の家来やお供の亡骸や刀を集め、埋めて供養した場所を「剣が岩」と名付けたのじや。

これは、多摩源流に伝わる小菅の昔々のお話じや…。

横瀬健さんに、この地名の場所をいくつか案内していただきました。 険しい山道を下り、川沿の美しい沢…。しかし現在の池の平へは登山道からも大分外れているため、足を踏み入れることはできませんでした。ところで何故横瀬さんはここまで詳しいのでしょうか。実は、玉姫たちが北条政子に助けを求め、鎌倉に落ち延びる手助けをするために、余沢から裏鎌倉街道の道案内に横瀬健さんのご先祖のご兄

弟お二人が玉姫一行に付き添われたと言うのです。玉姫と大青が身を投げた池の平から、ご先祖の横瀬さんは命からがら一人は余沢へ逃げ、もう一人は西原さいはら（上野原市西原）へ逃げ延びていました。別れ別れになったご先祖は、その後会うことは無かったのです。

ところが、令和元年初夏に突然奇跡が訪れました。

余沢の横瀬健さんが、青梅の友人宅を訪れた際、そこへ当時西原へ逃げ延びていた横瀬さんのご先祖のご子孫が偶然遊びにいらしていたのです。お二人は奇跡的に会うことが出来たのです。ここでようやく八百年振りに、それぞれのご先祖の口伝が一つに繋がったのでした。

令和六年四月中旬、初めて小菅村に取材で訪れました時は、小菅川沿いの桜が丁度満開を迎えていました。ここは「多摩川夢の桜街道」桜の札所・八十六番」にあた



狼岩

ります。山々の桜を眺めながらハイキングコースを、軽いトレッキング気分で歩かれるのもいいですね。

また、翌月の五月四日にはコロナで中止となっていた「多摩源流祭り」が五年振りに再開され、郷土芸能やジビエ料理を多くの方が楽しめました。そして小菅川のフィッシングイベント会場では、爽やかな川面に賑やかな歓声が響き渡っていました。

八百年もの間伝えられた「玉姫伝説」には、人と自然を大切に守ってこられた村人の念^{おも}いが込められ、今日の美しい源流を育んできたのではないのでしょうか。

小菅村の伝説を訪ね、暫しいにしへに心を馳せてみてはいかがでしょう。

〈取材協力・参考文献・写真提供〉「伝説が教える小菅村（一）」横瀬 健氏

「伝説が教える小菅村（二）」満田 正氏

（本多）

三、檜原 編

檜原村の話

東京都の島を除いて、唯一の「村」檜原村は、奥多摩三山（大岳山^{おおたけさん}・御前山^{ごぜんやま}・三頭山^{さんとうさん}）などの山々に囲まれた美しい緑と、自然が豊かな絶景地です。また、東京都でただ一つの「日本の滝百選」に選ばれている「払沢の滝^{はっさわ}」は、駐車場から歩いて二十分程で、遊歩道を森林浴をしながら滝まで気軽にハイキングで行けます。四季折々に、いろいろな表情が楽しめる滝です。

そして、檜原村は江戸時代から炭焼きや林業が盛んなところでした。

古くから盛んだった林業は近年では、海外産木材の輸入により次第に林業従事者は減少し、現在では多摩産材を使った施設や物作りを進めているそうです。

檜原村都民の森にかつて私は家族で行き、木工体験でティッシュケースと子供用

の椅子を作り十年以上も使っていますが、今では大切な思い出の作品となっています。

二〇二一年には、木のぬくもりや木の香りなど【東京の木】の魅力伝える檜原村おもちゃ美術館、村の豊かな森の恵みを生かした、体験型美術館が開設されました。



弘沢の滝

大自然檜原村の大岳山に昔から伝わるお話です。

鬼源兵衛の話

昔、檜原村に鬼源兵衛と呼ばれた力持ちがいました。源兵衛の母は子どもがいなかったので大岳山に願をかけ、お百度まいりに暗いうちから登り、朝日と共に祈りをし、麻の糸を一かせずつ奉納し、さずかったのが源兵衛だったのです。

源兵衛は大岳山の申し子といわれ、子どもどころからすもうでも力くらべでもかなう者もなく、大岳山の見える所ではなんぼでも力が出るといわれ、その怪力ぶりから鬼源兵衛と呼ばれるようになりました。

やがて源兵衛が若者となったところ、江戸に水を引くための玉川上水の工事のため、幕府から檜原村へ二十五人の人夫を出すようにとおふれがありました。源兵衛は「おれが一人行けば充分だ」といって出かけました。「なに、おまえ

一人が二十五人分じやと」役人はあきれはて、疑いながらも、源兵衛の仕事ぶりを見届けようということになりました。

そして、堰止めの石を人夫が一個一個もっこに入れて運んでいるのを見て、「オーイみんな、ちよつくらどいてくれ」とわれんばかりの大声で呼びかけ、まるで小石を投げるように、ブーンブーンと投げ飛ばして見る者の胆をつぶしました。源兵衛はやることなすこと万事おおらかで人に親切でしたので、その勇名を轟かすとともにい合せた人々いずれにも、親しまれました。幕府も源兵衛の手がらを認め、和泉大榎藤原兼重の脇差をほうびとして与えました。

また、母の奉納した麻糸をより合わせて一本の綱とし、その綱で八百貫の大石を山上に引きずり上げました。今でも大岳神社には、鬼源兵衛の揺ぎ石があります。普通の力でこの石を揺がすことはできるが、どんな大力でもころがすことはできないといわれています。

〈引用作品〉「おくたまの昔話第二集」 奥多摩民話の会

檜原村の人里バス停留所に咲く紅枝垂れ桜は「多摩川夢の桜街道」桜の札所・七十四番」です。冬の頃、枝垂れ桜の木を探していると、地元の人が通りかかり「この二本の桜は四月半ば頃になると、とても綺麗に咲くので是非見に来て下さい。待っていますよ」と声を掛けて下さいました。写真で見ると、枝垂れた枝からピンク色に咲く花は、バス停留所の待合小屋を覆いかぶさるように見事です。春がとても待ち遠しく感じられました。

そして、檜原村を流れる秋川と北秋川は本宿で合流して五日市、あきる野市を下り、昭島で多摩川に合流します。自然も歴史もたくさん魅力あふれる美しい多摩川は、街から街へと流れ、やがて東京湾へと注がれて行きます。

(渡辺)



鬼源兵衛のゆるぎ石
(檜原村郷土資料館提供)

福生の話あれこれ

福が生れると書いて「福生」

福は幸せとも言います。どんな街なのでしょう。

地名の由来は麻の生える場所の意味の「ふさふ」から、又アイヌ語で湖のほとりの意味の「フツチャ」から呼ばれる様になったとの説もあります。かつて「幸福駅」に始まった切符ブームは「福生駅」もその一つと言われています。

福生の人々との生活には多摩川と深いかかわりがありました。

江戸時代には鮎を採って献上したり、上流から材木を流すいかだ流しなどが行われていました。

かつての福生市内には、多摩川を渡るための橋はなく三ヶ所の渡船場がありました

た。上流から福生の渡し、牛浜の渡し、熊川の渡しと呼ばれていました。

福生地域の古くからの集落には、湧き水があつたり、浅く井戸を掘ることができ、多摩川沿いの段丘上に集まっていました。

水の便の良い場所を選んで家を造り、回りの田畑を耕して暮らしていました。人々が住むところには水は大切なことがわかります。

現在、渡船場があつた場所は確認できませんが、牛浜の駅から三十分位歩いた所で、多摩川中央公園の中に牛浜の渡しの碑があります。

そして、ここは「多摩川夢の桜街道」桜の札所・七十一番」です。多摩川沿いに五百本の染井吉野の木が植えられています。春になると見事な桜が見られる事でしょう。



いしはま うしはま としんあと
石濱(牛浜) 渡津跡

この街にも昔からのお話があります。

天狗のいる里

福生の町がまだ武蔵野の原っぱだった頃のお話です。

春の、ぽかぽかと汗ばむような暖かい日。一人の百姓が荒れ畑を一鍬、一鍬一生懸命耕していました。これを、近くの丘の上で眺めていたのが、天狗でした。金剛杖を側において膝を両手で抱く様にして何かぶつぶつ言っています。

「人間ってやつは、どうしてあんな馬鹿なまねばかりしているのだろう。あの広い荒れ畑を、こつこつ掘り返したところで、いくにちかかるかわからない。あんな四角い畑なんかいっぺんに持ち上げてどっこいしょ、とひっくり返せばすぐ畑ができ上るのに」百姓は、ひと仕事おえたところで、日が暮れてきたので、鍬をかついで帰って行きました。丘の上にいた天狗もいつかなくなりました。．．．がその夜遅く、先ほどの畑の前にふたたび姿を現わしました。

「さて、おれがこの畑をひっくり返してやるぞ、百姓のおっさん、明日の朝、ここがりっぱな畑になっているのを見たら、びっくりして、腰をぬかすだろな」天狗は畑の畦に手をかけて「うーん」とひと意気で持ち上げようとしたが畑はちっとも動かない。こいつ、手ごわいなと赤い顔を真っ赤にして、全身の力をこめて持ち上げようとするが、畑はびくともしない、二度、三度、五度、六度何回やっても同じです。天狗は、汗びっしょり。泥まみれになって、がんばったがもち上がらなかった。

「やれやれ無駄骨を折ってしまったわい」日が上がってきたので、天狗はあきらめて山に帰って行きました。高い鼻をさかなでして、おれがまちがっていた。人間は小さな事を一つ一つ積み重ねて大きな仕事をする生き物らしい、見そこなっていたよ」とつぶやいたとき。

〈参考〉「武蔵野の民話と伝説」原田重久

(馬場)

次も福生のお話です。

むじなと洪水こうずい

むかし、原ヶ谷戸はらがやとのがけに、「一いっぴきのむじなが すんでいました。そのむじなは、イノシシほどもあり、口くちから火ひをふくじゅつを しているほどでした。夜空よぞらにむかって 火柱ひしらをたてて、村人むらびとを おどろかしたり、にわとりごやに火ひをつけて、にわとりや たまごをぬすんだり、畑はたけのやさいを やきからしたり、とんでもない わるさをしていました。

てつぼううちの源八げんぱちは、イノシシがりの名人めいじんでしたが、なんと ねらいうちしても、むじなは、たまを ひよいひよいと よけるので、しとめることができませんでした。

ある夏なつの夜よる、源八げんぱちが よなべをしていると、せつちんごやのほうから、けん

かを しているような声こえが きこえてきました。

「しやらくせえことを いいやがって。おめえが、このおれさまと 火ひふきくらべを やろうだと?」「んだ。負まけたらおめえは、福生ふっさからでていってくれ。それがいやなら、おれのこぶんになれ」

そつとのぞいてみると、原ヶ谷戸はらがやとのむじなと 萱戸かやとのむじなが、口くちをとんがらして いいあっていました。萱戸かやとのむじなも、としは若いわかが、わるさにかけては あいてにひけをとりません。どうやら、火ひをふくじゅつも おぼえたらしいです。

「あのな おめえ。しつぽをまいて にげだすのは、そっちだべよ。なまいきこくでねえ」「よし、きまった。この村むらの家いえを、一いっけんずつ 火ひをつけていって、どっちが たくさんやきはらったかで きめべえよ」「いいじゃんかい。あしたの夜よる、月つきが 大岳山おおたけさんにかくねたら、この源八げんぱちのそこから おっぱじめるとしべえ」

二ひきのむじなの はなしをきいて、源八はびつくりぎょうてん。牛浜のと
しよりの家へ、あたふたかけこみました。

としよりも、てつぼうだまさえ よけてしまうほどの むじなを、どうやっ
て やつつけたものか、ちえがうかびません。それをきいて 村中の人は、ね
てもいられなくなり、「こまった、こまった」といいながら、じぞう堂へあつまっ
てきました。

「おじぞうさま、どうか たすけてくんろい。むじなに、村をやかれそうでお」
みんなで手をあわせて、おねがいました。村人たちは、いつも いいこと
もわるいことも、おじぞうさまに おうかがいすることに していました。

おじぞうさまは、しんぱいがおの村人たちに、「あしたのひるごろ、たびの
お坊さんが村を とおるはずじゃから、よくおねがいして みるがいい」と、
おつげになりました。

村のいり口で、朝から 源八たちがまっっていると、 こじきのような お坊

さんが やってきました。お坊さんは、源八たちから ねがいをきくと、原ヶ
谷戸のがけへいき、手にしたつえで、ズブリ ズブリと あなをあけてあるき
ました。

「なにしているんだべ、あのお坊さま」「だいようぶだべか。たよりなさそな
お坊さまだが」

みんなは しんぱいそうに、お坊さんのあとを ゾロゾロついて あるきま
した。そのお坊さんは、いくつか あなをあけると、じぞう堂にはいつて、ねっ
しんに おきようをあげました。

すると、はれていた空が、きゆうに まっくらになって カミナリがなり、
ザーツと、大雨がふってきました。雨は、夜になっても やみません。

これでは、月はでないし、むじなどもは 火ふきくらべができません。

「さすが、お坊さま。きたねえなりしていても、よほど、えらいお人にちがいねえ」
と、みんなは 手をたたいて、大よろこびしました。

その日から、雨は十二日もふりつづき、おじごうさまのえん日が、やってきました。あいかわらず 雨ふりでしたが、村人たちは お堂にあつまって、村が、火事から すくわれたことを よろこびあい、のめやうたえの おまつりをしました。

朝になっても、雨や風は やみません。

原ヶ谷戸のがけからドツと、大水が ふきだしてきました。それは、お坊さんが つえであけたあなからでした。原ヶ谷戸のむじなは、そのふきだす大水にあつというまにおしながされ、萱戸のむじなも、あふれだした 上水にのまれて ながされていきました。

ところが、洪水は 村の田畑もおしながし、家の土間のなかまで ながれこんできました。

「お坊さま。いくらなんでも これじゃ、村までながされてしまうべよ」

「ふむ、そうじゃな。むじなは ながされたようだし、もう これでよかろう」

お坊さんは そういうと、雨のふりしきるなかを そとへでていきました。

そして、村はずれの 上水橋のそばにたち、しばらく ねんぶつをとなえてから、「かつー」と、大声をだし、じめんふかく つえをつきさし大きなあなをあけました。すると、それまで たえまなく ふっていた雨は、ぴたりとやみました。そして、あれくるつていた 洪水が、ゴウゴウと 音をたてて、そのあなにすいこまれていき、みるみる 水はひいていきました。

お坊さんは、それをみとどけると、そつと 村をでていきました。

源八たちは、「大水で、家も人も かあながれに ならなかったんは、みんな あのお坊さまの おかげだべ」「それというのも、あのお坊さまを よんでくれた おじごうさまのおかげだよ。なんだか、お坊さまのかおは、おじごうさまに よくにいたでねえかや」「そういわれれば、そんなきがつきつと、おじごうさまが、生きぼとけになって、おらたちを たすけてくれたに ちげえねえ」と、手をあわせました。

村人たちは、みんなで力をあわせ、ながされた田畑をもとどおりにし、ま
えにもまして、おじごうさまを しんじんするようになりしました。
そして、お坊さんが、ねんぶつをとねえた 上水橋を、ねんぶつ橋とよんで、
うやまいました。

それからは、そのあたりには、
わるさをする むじなはいなくな
り、源八は、畑をあらす イノシ
シがりに、せいをだしたので、み
んなも あんしんして くらすこ
とができたそうです。

〈引用作品〉「むかし福生」 中沢 潮



牛浜地藏尊

このお話は、中沢 潮作 「むかし福生」の中から引用させていただきました。

異国情緒の漂う街、福生

そして、多摩川は、今日も悠々と流れて行きます。

栄枯盛衰 世の移り変わりを静かに眺めながら、やがて流れ着く大海原を目指し
て、下って行きます。

(富田)

稲城の昔ばなし

街路樹のゆりの木がオレンジ色の花をつけている季節、稲城市立中央図書館を訪れました。

緑豊かな城山公園内にあり、体験学習館が併設されていました。

稲城市は南多摩東端にあり、南東部から西部にかけて川崎市と接し、北は多摩川を隔て府中に接しています。

北の境界線に当たる多摩川を一边としてほぼ三角形をなし、まが玉の形ともいわれています。

川の堤防沿いには稲城北緑地公園があり、春には土手沿いの桜がみごとです。ここは「多摩川夢の桜街道」桜の札所・二十番」です。

市内の多摩丘陵には新宿から三十分という近さにもかかわらず、タヌキ・オオタカなどが棲息し、豊かな自然が残る里山として知られています。

特産の梨は江戸時代から栽培され、春の盛りに白い花がどこまでも続いているのは、稲城を代表する風景のひとつです。

稲城に人が住み始めたのは、今から約二万年も前のことです。

それから時がすぎ、縄文時代・弥生時代・古墳時代と続き、そして現在に至るまで、人々の長い歴史の中で語りつがれた昔ばなしを紹介いたしましょう。

坂浜の一番鶏

今はもうありませんが、坂浜村の於部屋というところに、妙福寺というお寺がありました。真言宗のお寺で、本尊として木造の観音様がまつられています。明治時代の初め頃のお話です。

妙福寺は、大変さびれた小さなお寺で、お堂の中のあちこちで雨もりがするようになつていました。観音さまは、お寺にとっては大変大事な本尊です。もし雨もりが原因で朽ち果てるようなことになったら大変です。

村人たちは、みんなで相談して、観音さまを浅草のある塗師のところへ、塗り替えに出すことにしました。観音さまの傷んだところを修理して、金箔を塗ってもらうためにです。

塗師のところへ観音さまを届けてから一か月ほどして、塗り替えができる約束の日がやってきました。村人たちは、みんなで一緒になつて取りに行くことにしました。浅草まではかなりの距離があるので、朝早く出発しなければなりません。農家で飼っているにわとりの一番鶏が鳴いたら出かけようということになりました。

ところが、いつもは午前二時頃に鳴くはずの一番鶏が、その日に限つて、晩の九時頃にいつせいに鳴き出しました。その頃の農家には、時計がありません

ので、一番鶏の鳴く時刻をたよりにするしかありません。

何の疑いもたず、すぐに身支度をととのえて、みんなで出発しました。早く出発したので浅草に着いても夜明けになりませんでした。

村人たちが浅草に着くと、塗師の家はまだしまっていました。早々に金箔に塗り替えた、ピカピカの観音さまを受け取つて、だいじに抱えながら持つて帰りました。

九段坂の上まできたとき、ようやく東の空が明るくなりはじめました。ほつとしてひと休みしていると、けたたましい半鐘の音が聞こえてきました。どこかで火事がおこつたらしいのです。

しばらく見ていると、浅草の方面から火の手があがり、みるみるもえ広がつていく様子がわかりました。その火の行方を見ながら、一行は帰り道を急ぎました。観音さまは立派な姿になつて、村に帰ってきました。

観音さまが帰つてきてから十日ほどして、あの時の浅草の火事が、塗師の家

であったことがわかりました。みんなは大変驚きましたが、もつと驚くべきことがわかったのです。

じつは塗師は大変欲の深い男で、塗り替えに出した観音さまの中の「おはらごろも」という小さな袋の中に入っていた純金の玉を抜き取ったのです。これを知った観音さまが塗師に罰をくわえたということです。そして村中の一番鶏をいつもより早く鳴かせたのも観音さまのお力があつたからだということです。

このようなわさは村中に広まり、観音さまはいっそう村人たちの信仰を集めるようになりました。その後妙福寺は廃寺となつてしまいましたので、近くの高勝寺に移され、今度は「高勝寺の観音さま」として長く信仰されるようになりました。

〈引用作品〉「稲城の昔ばなし」稲城市教育委員会

過日高勝寺を訪れました。

観世音菩薩立像は平安時代後半の制作と考えられ、けやきの一木作りで、高さ

一五・五センチの立像です。

市内では最も古く貴重な仏像といわれています。

境内の地藏堂内の厨子に安置され、千年をこえた今も静かに祀られています。

高勝寺からさほど遠くないところに、こんなお話もありました。

青龍にのってあらわれた妙見さま

百村の妙見尊では、毎年夏の盛りの八月七日に「蛇より行事」が行われます。青萱をより合わせて大蛇をつくり、無病息災を祈るめずらしい行事です。

江戸時代の初めの寛文二年（一六六二年）に、疫病が大流行しました。村人たちはなんとかこれを防ごうと考えました。妙見尊は天平宝字四年（七六〇年）に妙見さまが青龍にのって天下り、この地に現われたという言い伝えがのこる

古い歴史をもつ神社です。

この言い伝えを思いおこした村人たちは、皆で青龍をつくってお祭りをすれば疫病が村の中に入ってくるのを防ぐことができるだろうと考えました。さっそく村のあちこちに生えている青萱を刈り取って、より合わせて大きな龍をつくりました。そして妙見尊が祀られている妙見山に村人総出で担ぎ上げました。大きな龍は妙見山のふもとから山頂の神社までのびて、さらに妙見山を七回り半もする長さであったと言われます。

村人たちの祈りによって、疫病は流行せず、またもとの静かな村にもどりました。

青萱でつくった青龍は、その形が綱でつくった大蛇に似ているところから「綱より」とか「蛇より」とか呼ばれて、現代にまで伝えられています。そして三百年以上にわたって百村地域のの人々によって守り続けられ、平成四年に東京都の無形民俗文化財に指定されました。

〈引用作品〉「稲城の昔ばなし」稲城市教育委員会

このお話の舞台の妙見寺は、多摩丘陵の端に位置し、うつそうとした木々に囲まれた、まるで山の中に迷いこんだような場所にありました。全国でも数少ない神仏混淆のお寺です。

昭和初期には高浜虚子氏の吟行会も催され、記念碑もありました。

今年の「蛇より行事」で使われた、青萱で作られた大蛇が「三夜塔」という石の塔に頭をおき、長い長い石段を上へ上へと本殿まで続いています。

この行事は毎年八月七日に行われています。

生きているものの営みは、何時もなにかしらの疫病に見舞われています。

そして、それを乗り越えていくすべも人は持ち合わせています。

蛇より行事に込められた祈りとともに・・・。

(中西)

招き猫の物語

招き猫で有名なお寺

東京には、お寺の名前がそのまま駅名になっているところが多くあります。

高円寺、泉岳寺、祐天寺、護国寺など。

小田急線沿線、招き猫で有名な「豪徳寺」もその一つです。

最寄りの駅、車内でも、招き猫をあしらった電車が運行していることがあります。吊り革が招き猫をかたどっていたり、床面に猫の足跡が施されていたり、乗客を楽しませてくれます。

地元の名刹「豪徳寺」は、正式名称は、大谿山豪徳寺^{だいけいざん}で、文明十二年に創建した

臨済宗の弘徳院が前身とされます。その後、曹洞宗に改められ、彦根藩の支配となり彦根藩主・井伊家の江戸における菩提寺となりました。

また、台東区の今戸神社と共に「招き猫発祥の地」として知られています。

その「招き猫発祥の地」の由来は、二代藩主・井伊直孝と、深い関係があります。はじめは、一匹の猫が鷹狩りのお殿さまを寺に招いた事でした。

ある日、お殿さまが鷹狩りに出かけた帰り道、小さな寺の前を通りかかると、門前で一匹の猫が手招きをしていました。お殿さまは、猫に導かれて寺に入って休んでいると、たちまち空が曇って雷が鳴り、雨が降り始めたのです。

住職の愛猫「たま」のおかげで難を逃れ、その上、雨宿りの間、住職との話を楽しめたお殿さまは、荒れていた寺の再興に尽力しました。この事が縁となり井伊家の菩提寺になったと、伝えられています。

このお殿さまが、彦根藩二代藩主・井伊直孝でした。

招き猫といえば、片方の手に、小判を持つている姿を想像しますが、

豪徳寺の「招福猫児」は小判を持たず、右手を上げて福を招いているのが特徴です。

また「招福猫児」は、福そのものを与えてくれるものではなく、福の機会を与えるてくれるもので、その機会を生かせるかどうかは本人次第だそうです。

招福殿の周りには、隙間なく溢れんばかりの大小様々の「招福猫児」が奉納されています。

また土人形の招き猫は壊れやすい。しかし壊れると「身代わりになって、守ってくれた」と感謝したそうです。

大勢の参詣者が訪れていて、受付に



豪徳寺の招き猫

は「家内安全」「商売繁盛」「開運招福」を願い長い行列をして「招福猫児」を手に入れました。

この「招福猫児」を、大切に家に持ち帰り可愛がると福を呼び、願いが成就した後、返納に行くと、さらにご利益があるとのことでした。

参詣者は外国の方が多く、いろいろな言葉が飛び交い、国際的でした。

私は何度か訪れていますが、駅近くの「招き猫発祥の地」を訪ねては如何でしょうか。

(川井)

世田谷の民話

世田谷区は、三万年位前から人が住んでいたといわれています。

室町時代には、後北条氏が世田谷に新たな宿場（世田谷新宿）を設けるとともに、楽市を開きました。この楽市は形を変え、今もボロ市として存続しています。

昭和七年十月一日の東京市の区域拡張により、世田谷区が誕生し、昭和十一年十月には千歳砦村が世田谷区に編入され、現在の大きさになりました。

現在、約九十万人が住む世田谷区は、緑化の推進や環境保全など潤いある街づくりに取り組んでいます。

私は世田谷区に伝わる民話について調べました。「池尻地区」、「太子堂・三宿地区」に伝わる民話を各一編ずつ紹介いたします。

池尻地区

からすが村の百姓家を守る

その年はいつまでも寒い日が続いて春の兆しは見られませんでした。春の遅い年はどこの家も仕事が重なるので百姓は猫の手も借りたいほどの大忙しでした。

こんな時に幕府から

「今年から鳥やけものを捉えたり、傷つけたりしないこと。たとえ小鳥一羽でも殺したものは罪人にする」という、きびしいお達しが、村々の名主に届いたのです。

「これは困ったものだ」

百姓たちは、みんなそう思いました。というのも、この池尻村にはあちこちに森や林があり、小川の清い流れもあって、鳥やけものたちがたくさん住んでいるからで、これらの鳥やけものたちはしばしば田畑を荒らすのでした。

池尻村の平吉の家でも、今年は春が遅かったので、田おこしと畑の種まきが重なって、家族はみなして朝の暗いうちから、力を合わせて働きました。

その日、平吉はひとり残って畑仕事を片付けた後、家へ帰る道で親子のからすが、うずくまっているのに出会いました。よく見ると、子からすの胸に傷があるのです。

「これは痛かろう。かわいそうに。」

平吉はさっそく子がらすを抱いていって、家で手当てをして放してやりました。子がらすのことを心配して平吉の家の屋根にいた親のからすは、子がらすが飛び立つのを見ると、一緒に夜空へ飛んでいきました。

それからというものの、雨の日も風の日も、この親子のからすは平吉の家の屋根に来ていました。そして村の田畑を荒らす鳥やけものを見ると、すぐに飛んでいって追いはりました。

こうしてこの親子のからすが池尻村では田んぼや畑を守ってくれたので、いつもと変わらぬ実りの秋を迎えることができたのでした。

太子堂・三宿地区

太子橋の子づれキツネ

「いたぞ、いたぞ」

大勢の村人の集まる前で、逃げ場を失った子づれのキツネが、きょとんとし

ています。

じつはきょうは、名主のいいつけで村をあげてのキツネ狩りの日だったので、村人たちは声をはり上げ、鳴り物をならして、キツネのいそうな土器塚や、上原あたりの、やぶをかき分けて探し回り、ようやくキツネのすみかを見つけたのでした。

でも、その後村人たちは、誰一人としてこの親子のキツネをつかまえようとはしません。口に出さないまでも、みんな後のたたりを恐れているのでした。

村人は名主がいらないのをさいわいに、そのまま帰ってしまおうとする者もいました。

「かわいそうだ、逃がしてしまおう」

と言うことになって、今度は追いはらうまねをしましたが、親ギツネは子ギツネをかばって立ちすくむばかりで、逃げようとしません。

そのうちに村人は一人去り、二人去りして、みんな円泉寺へ引き上げてしま

いました。名主がようすを見に来た時には、もう親子ギツネも村人も、だれもいませんでした。

でもその日から、太子堂村ではギツネにばかされたり、田畑を荒らされることがなくなったのです。そればかりか、暗い夜にはどこからともなく親子ギツネと子ギツネがちょうちんをもつてあらわれ、太子橋を渡ろうとする村人の足もとを照らし、行き道をしばらく案内してくれた後、どこかへ消え去るのでした。

親子ギツネの親切は、この後はいつまでも続きました。

「きつといつかのギツネたちが、恩返しをしているにちがいない。」

村人は、みなそう思いました。

こうして、太子堂の村は、親子のギツネに守られて、女や子どもでも夜道を安心して歩けるようになり、しあわせな村になりました。

〈引用作品〉「ふるさと世田谷を語る」世田谷区

(富田)

七、八王子 編

桑都八王子と私の思い出

八王子の名前の由来と思い出

皆さんは、八王子市の名前の由来をご存知ですか？

実は、八王子という地名は全国に分布しています。

それは、牛頭天王と八人の王子をまつる信仰が広がり、地域の信仰を集める中で「八王子神社」や「八王子権現社」が建立され、地名として各地に定着していったからです。八王子市の起源もここにあります。

平安時代、延喜十六年（九一六年）に華嚴菩薩妙行という僧が元八王子町にある深沢山に庵を建て、牛頭天王と八人の王子を祀り「八王子権現」と称したことに始

まるといわれています。

後に、北条氏照が深沢山に新しく城を築き八王子権現を守護神としたことから「八王子城」と呼ばれるようになりました。

このように、八王子信仰の広がりや八王子城の築城など、歴史的背景のもとに成立し、定着したのが「八王子」という地名だったのです。

皆さんは、駅前にどんな風景を思い出されますか。

現在の八王子駅のマルベリーブリッジのようなものでしょうか。

それとも、ロータリー、噴水や花壇、広告塔や銅像、その先に延びる大通りといったものでしょうか。

私が八王子に出てきたのは、昭和四十三年（一九六八年）のことです。

JR八王子駅北口の駅前ロータリーには、円形花壇と噴水、それに高さ一五mのコンクリート製の広告塔が有りました。その白い広告塔には赤いネオンで「織物の

八王子」の文字が見えました。駅前ロータリーからは、甲州街道に向かって真っすぐ大通りが延び、両側には並木がありました。この並木の樹を目にとめた時の「驚き」が、当時の光景とともに今でも思い出されます。

何と、それは「桑の木」だったからです。

「えっ、桑の並木?」、それも「駅前の大通りが?」……。

街路樹と云えば、「イチヨウ」、「サクラ」、「ケヤキ」が多いからです。

それに、私の生まれ故郷の群馬県も養蚕の盛んな土地柄ですが、さすがに「桑の木」の並木は見たことがなかったからです。因みに、JR前橋駅から県庁まで「ケヤキ」の並木が今も続いています。



八王子駅北口前の歓迎塔（八王子市提供）

さて、世界でも大変珍しい桑並木でしたが、現在は「ベニバナトチノキ（マロニエ）」に植え替えられています。

若し、今も桑並木がそのまま残っていたなら、「桑都・八王子」の玄関口にふさわしい光景であつたろうにと惜しまれます。

なお、甲州街道「八王子駅入口」交差点から「浅川大橋南」までの通りには、「桑並木通り」の標識や「桑並木の由来」の碑とともに、今も桑の木が凡そ二〇〇mに亘って両側に残されており、往時を窺い知ることが出来ます。

現在のＪＲ八王子駅は、東京西部のターミナル駅として、猛暑や台風や大雪などの日、駅ビル・マルベリーブリッジがテレビ画面に映し出されるのも、すっかりお馴染みとなりました。

これもまた、昔を知る私にとっては大きな驚きの一つであります。

（横倉）

織物の町八王子

私が八王子に来たのは昭和五十一年一月の寒い日でした。

春に小学校入学の長女、三歳の次女、四人家族です。

まだＪＲ八王子駅は古く、ロータリーには、「織物の八王子」の看板が立っていました。

大家さんは、もと織物工場をされていて、ここ元横山町近辺は、織物工場、襦屋さん、染物屋さんが集まり、浅川で糊を流す作業もしていたそうです。

この地区、浅川大橋から大和田橋の間を『沢淵』といい大変賑わっていました。八王子で出来た生糸を運ぶ道を「絹の道」と呼び、八王子から鏈水を通り、横浜につながりました。

昭和五十年過ぎに元八王子に織物団地が出来、徐々に元横山町の『沢淵』は、元八王子へ移っていきました。

歴史の町八王子ではいろいろ行事も多く、子供が楽しむ「初午」。初午の日は織物工場などお稲荷様を祀っているところをまわりお菓子を頂いていました。

また江戸十二里の、八王子には、十五宿あり、最寄りの竹の鼻公園には立派な碑が立っています。

隣の永福稲荷神社では毎年ショウガ祭りもひらかれます。

織物の町、歴史の町「八王子」をお楽しみください。

(川井)

養蚕の指導をしていた父の思い出

八王子の話で、ふと思い出しましたのが、昔父は養蚕指導員で、八王子の養蚕農家を回っていた。という話です。私が四、五歳のころに聞いた話です。記憶ももう定かではありませんでしたので、何か手がかりになるものは無いかと、父の他界後十年振りに父の本棚を探してみることにしました。ところが殆ど写真ばかりで、な

かなか手がかりになる物がありません。すると古い木の文箱が棚に積まれていました。どうせ中身は手紙だろうと思いましたが開けてみることにしました。文箱の中は古本のような懐かしい香りがして、色あせたはがきや手紙ばかりでした。生前、もっと養蚕の話を聞いておけば良かったと思いつつも文箱の底にあった茶封筒に、ふと目が止まりました。恐る恐る中を見てみますと、昭和二十三年に片倉工業株式会社八王子製糸所の蚕業指導員であった頃の身分証明書と昭和二十八年四月から東京都の検定繭採取監督職員の辞令が入っていました。

当時は、鶴川村や多摩村、稲城村の養蚕戸数約一七〇戸（農林省農林経済局統計調査部「養蚕に関する町村別統計書・東京都編より」）を数名で担当していたことが分かりました。

父は当時府中の自宅からバイクで通勤し、村々の養蚕農家へは自転車で回っていたようです。私にはいつも街道の話や、蚕は新鮮な桑しか食べないことや、養蚕農家の方に美味しい手打ちうどんを振る舞っていたことを嬉しそうに話してい

ました。

そして一番目を輝かせて話していたのは、初めて富岡製糸場を訪れた時の、壮大な生糸生産の光景でした。

戦後、織物の生産は大幅に落ち込みましたが、何とかそれを乗り越え、一時期は「ガチャ万」（ガチャと織れば万と儲かる）と呼ばれるまでになったそうです。

父はほんの十四年間という短い間でしたが、八王子の産業に少しでも携わる事が出来て本当に嬉しかったようです。

その後養蚕は、生産者の高齢化や後継者問題等により減少してしまいましたが、現在も八王子市の長田誠一さんが養蚕農家を継承されていることを知り、令和七年二月に桑都日本遺産センター八王子博物館で長田さんの講座「繭で糸繰り体験」に参加させていただきました。

長身で、明るく優しいような長田さんは、奥様やスタッフの方々と講座の準備に追われていらっしやいましたが、少しお話を伺うことが出来ました。

早くにお爺様やお父様を亡くされ、十九歳で養蚕農家を継がれたこと。現在は養蚕教育にも熱心に取り組まれ、小学校へも出張授業に行かれたり、養蚕の見学や蚕の飼育を通して、子供たちに命の大切さを伝える授業をなさっているそうです。

そして七十年前、養蚕農家へ指導員が来ていたということは聞いてはいたそうですが、長田さんの家に父は訪れてはいなかったようです。

講座は、お湯に浸した繭から生糸を紡ぎ、その生糸をプラスチックコップの回りに均等に巻き付け、その上に好きな柄を載せ又生糸でまき付けミニランプのシェードや小物入れを作るというものでした。お子さんから高齢者の方々まで約四十名程の皆さんが、とても楽しそうに参加されていました。

私は生糸を紡ぎながら、生糸のしなやかで美しい光沢にすっかり感動しつつ、七十年前父もこの美しい生糸に魅せられていたのだと思いました。そしてまたあの頃の楽しそうに話す父の顔を懐かしく思い出していました。

（本多）

八王子と私の思い出半世紀を経て

昭和四十五年三月、東京に憧れて富山から就職で上京し、当時八王子に本社があった「忠実屋」に入社しました。調布店と下北沢店に一年余りしか働いていませんでしたが、そこでの出会いから縁があり、結婚し八王子に住むことになり、気がついたらもう半世紀も過ぎていました。八王子に来て懐かしく思い出されることは新入社員研修の頃、並木町からバスで京王八王子駅までの帰り道の事でした。「あつ、八王子駅だ、降りなければと、一緒にいた同期の地方から来ていた仲間達と急いだところ、ここは朝と違う感じがするよね。間違つて降りるところでした。何故八王子の駅が二つあるのかな……。それも少し離れた所に……。田舎には一つしかないけど」と思った事など、今にして思えばJR八王子駅と、京王八王子駅の事だったので。そして、JR八王子駅北口ロータリーに「織物の八王子」と書かれた白い八王子織物タワーが立っていました。バスの中から「八王子は織物の街なん

だ」と思ったことが思い出されます。今は、八王子駅前正面に八の字に巻いた絹の布をイメージしたモニュメント「絹の舞」があります。そして、振り返ってみると家の周りにも桑畑がありました。

ある時のことです。子供たちが学校の帰り道に、桑の実を食べて、唇を赤黒くして帰り、その時の顔を見て驚いて笑ったことや、白の体育着がシミになり、「困った、どうしよう」と思った事を思い出しました。

そして以前、機織りをされていた知人から機織りはのこぎり屋根と言って、直射日光が当たると糸の色が分かりづらいので北側に窓があったことや、昭和三十年後半から昭和五十年位まで、ネクタイ生地を東京の間屋街の柳橋、東日本橋、浅草橋へ車で運んでいたというお話をお聞きしながら、機織りの音が響く八王子の街を思い浮かべていました。

それから、私が八王子へ来て京王線から見た富士山、京王線北野駅辺りから見たように思います……。テレビ、写真、カレンダーでしか見たこともない私にとつ

ては、初めての富士山、真っ青な空に真っ白な雪化粧した富士山、本当に感動しました。今も富士山を見るたびに、友人に「ねえ、あれ富士山なの？ 本当の富士山なの？」と小声で何度も聞いていたことが、つい先日のように思い出されます。

多くの思い出のある八王子で暮らし五十年余り、時は流れ月日も経ち、いつしか私は八王子の人になっていました。

(渡辺)

八王子で体験した空襲のこと

八王子の思い出と聞かれると心が震えます。

それは戦災にあった、あの日の夜のことが思い出されるからです。

当時、私の家は八王子の本郷町で織物業を営んでいました。

昭和二十年八月一日、私は小学校二年生、弟は幼稚園の年長組で二人とも夏休みでした。

祖父母は、八王子の横山町の親戚の息子が戦死し、その葬儀の手伝いに出掛け、家には母と私と弟の三人でした。

以前、祖父は、まだ内地にいた息子（母の弟）の面会に行ったとき、空襲で逃げ遅れた人々の悲惨な状態を目にし、命が一番大切なので物など持たず早々河原へ逃げるようにと常々言っていました。

するとその日の夜中に、とうとう空襲警報が発令されたのです。

慌てて母と弟と広い道路に出てみますと、大勢の人々が河原に向かって歩いていました。タンスを担いでいる人もいました。

河原の道なき道を歩いているときに、人の腕が道に落ちていました。私は本当にびっくりして足がすくんで前に進まなくなりました。

「早く行きましょうね」と母にはげまされてやっと歩きました。

頭上では爆弾の音が響き渡り、空は真っ赤に染まっていました。

そしてようやく河原に辿り着くと、三人で枯れすすきの上に座り込んでしまいま

した。その間中も、爆弾の音が響き渡っていました。

そのうち夜明けとともに爆弾の音が静まり、B29がやっと去って行きました。人々は自然と町の方へ無言で歩いていました。私も母と弟と一緒に歩いていました。町の家々は全部燃え焼野原になっていて、私の家も焼けてしまいました。

そこからどうやって河原の橋を渡って八王子の中野の親戚の家に行ったのか今でも思い出せません。

そして、あの時の恐ろしい戦争体験は、二度とあってはならない。これから生きる子どもたちには、決して体験させてはならないと思います。

(富田)

「桑の都」 八王子に伝わる松姫さまのお話

八王子は江戸時代、甲州街道の宿場町（八王子宿）として栄え、絹織物産業（多摩織）養蚕業が盛んで、「桑の都」また、桑都「そうと」とも呼ばれていました。

このお話の中の信松院しんしょういんは中央線西八王子駅から徒歩十五分位の所にあり、信松院の前の通りは松姫通りとなっています。

また「御所水ごしょみづの里」は松姫さまゆかりの地であり、今は富士森公園のスリーボンドスタジアムの入り口側の近くに御所水弁財天があります。鳥居の前に立つと、静けさの中に、トントンカラリトントンカラリと聞こえてくるような・・・そんな気がする所です。

それでは 菊地正作「とんとんむかし」よりお話をご紹介します。

松姫さまの糸毬ゆらり

とんとんむかし、今の台町三丁目にある信松院しんしょういんというお寺は、戦国武将・武田信玄の姫君である松姫さまが開いたものと伝えられておると。松姫さまは、一五八二年に武田家が滅ぶと、追手をのがれて、恩方おんがたまで落ち延びてこられた

そうじゃ。

遠くに見えるお寺の名を聞くと、心源院しんげんいんといわれ、姫は、はらはらと涙を流された。

父君の信玄と、読み方が同じだったからじゃ。

そして、心源院にお世話になることにしたそうじゃ。

それから心源院の卜山和尚ぼくざんおしょうの厳しい修行のもとで、髪を下ろし尼僧になったそうじゃ。

或る日、松姫さまは、夢を見た。観音様が現れて、「これからは一人で、庵で暮らし、尼僧としていきなさい」と、告げられた。

そこで、御所水ごしょみずの里に庵を結ばれた。その後、今の信松院に移られて、生涯を静かに送られたそうじゃ。

庵での暮らしは貧しく、畑を耕し野菜を作り、蚕を飼って繭を作り、糸を紡いで機を織り、反物を売って、暮らしたということじゃ。

さて、八王子の在に一人の機織り娘がおった。その娘はとっても熱心に、機を織るんじやが、どうも不器用で、良い反物が織れなかった。

或る時の事、いつものように、呉服屋の小僧さんが、出来上がった反物を取りに来た。

娘は反物を渡してから、「もっと腕を上げれば、沢山お金がもらえるだろうに・・・」と愚痴をこぼしたそうじゃ。

すると小僧さんは、「松姫さまというお方が、尼さんになって庵を結んでおられるそうじやが、なんでも、たぐいまれな、機織りの技を持っておられるとか、一度、秘けつをうかがってみては」と、教えてくれた。

娘は、腕が上がればと、庵を訪ねてみることにしたそうじゃ。

松姫さまのところへ来た娘は、「どうしたら上手に織れるのか、教えて下さい」と頼んだ。

すると松姫さまは、微笑みながら、「私が大切にしている糸毬をあげましょう。

これを機に吊るして、織ってみなさい」と言つて、糸毬をくださったと。

娘は、早速糸毬を自分の機に吊るし、織ってみた。

トントンカラリ、トンカラリ、

トントンカラリ、トンカラリ、

織り始めると、吊るした糸毬が揺れ出した。

娘がその動きに合わせて織ると、どうしたことか、いつになく滑らかに織れたと。

そして、いつのまにか立派な反物が出来上がったそうじゃ。

その後、娘は糸毬を大切なお守りにして、次から次へと、素晴らしい反物を織り上げていったということじゃ。

トントンカラリ、トンカラリ、とんとんむかしは、へえしまい。

〈引用作品〉「とんとんむかし」高尾山とんとんむかし語り部の会

松姫さまが、幾多の難関の末にたどりついた八王子。

この地で糸を紡ぎ、織物の技を里人に伝えました。

この織物が、八王子織物として、発展につながったと言われています。

また高尾山は、「霊気満山高尾山―人々の祈りが紡ぐ桑都物語」として日本遺産に認定され、年間を通じて沢山の観光客や、登山者が訪れます。近年では、海外旅行者も多くなり、以前に増して賑わっています。

八王子の浅川は、日野市で多摩川に合流し、二子玉川を経て東京湾へと流れ着きます。

(馬場、富田、中西)

文責
川井方子 富田和美 富田元子 中西邦子 馬場エリカ
本多美恵子 横倉充 渡辺真記（あいうえお順）
協力
丹波山村 小菅村 檜原村 福生市 八王子市 稲城市 世田谷区 丹波山村郷土民俗資料館
檜原村郷土資料館 立川市立中央図書館 稲城市立中央図書館 世田谷区立中央図書館
八王子市立中央図書館 桑都日本遺産センター八王子博物館 福生中央図書館・郷土資料室
長田誠一様 梶本崇広様 NHK学園ぐにたちオープンスクール
NHK学園ぐにたちオープンスクール「平野啓子の語りの世界」受講者全員 平野啓子事務所
フィスエイワン有限公司 美しい多摩川フォーラム会員、地元の皆様

調整・連絡
本多美恵子

指導
平野啓子（美しい多摩川フォーラム副会長）

企画・製作
美しい多摩川フォーラム・教育文化部会

制作
美しい多摩川フォーラム

発行
美しい多摩川フォーラム

東京都青梅市勝沼三一六五 青梅信用金庫内
電話（0428）2415632

発行日
二〇二五（令和七）年八月三十日